

老人は夢を見ていた。

雨が降っていた。

温かな泥に突っ伏し、ただ息を浅く継ぎ、己おのれが己でなくなる瞬間を待っていた。

装備は全て捨て、もはや動かない片足を引きずり、転げ、這いずり回り……そうして逃げおおせた果てにもまた、雨が降っていた。

もはや、凍えも乾きもなかった。

ここで死ぬのだろう。

恐れなどとうになく、腐った世界に貸借もないはずだった。

ただ、懐にある防水ケース、その中に収めたものが残り火のように疼うずき、彼に呼吸を止めさせなかった。

やがて

煙雨の向こう、かすかな気配を得た。

何人かの足音だった。

どのみち幻聴だろう、最初はそう考えた。

絶望には慣れていたが、希望には慣れていなかった。

やがて、足音は近づいてきた。

再び思考を巡らそうとした時、足音のひとつが彼の傍そばに止まった。

吊弾帯スリッパの軋きみから、相当な重量の背囊ザックを背負っているのが伺えた。

「右足が潰れてるな」

中年の男の声だった。

次いで、脇腹を突く感触があった。

自動小銃の銃口だ。どうやら死体に見えるらしい。

あるいは、これから死体をこしらえるつもりか
わずかに腕を動かし、小蠅のように無礼な銃口を払おうとする。

不意を突かれたのか、男が息を飲んだのがわかった。

「おい、あんた、生きてるのか？」

「……多分な」

そう答えた。声が出ることが自分でも信じられず、さながら不本意な不死者に思えた。

「あんたも屑屋か？」

銃口はそのまま、重ねて問われる。

それはさらに難問だった。

「違う……」

十何時間か前、封印都市にいた時はそうだった。だが、今は廃業している

その後を接ごうとして、別の感情が沸き上がってきた。

驚くべきことに、それは恥じらいだった。

狂人じみた滑稽さと馬鹿馬鹿しさは、その生業を現実のものとする誘惑に競り負けた。

そうだ、かまうことはない。

最初の馬鹿が洞窟からそれを眺めてから、同類はそれこそ、星の数ほどいたのだから。

彼は答えた。

「俺は星屋だ」

あれから何十年が経っただろう。

まるで昨日のここのように思えた……

追憶は雨に溶け込み、別の気配を呼び覚ました。

また足音だ。

いや、違う。

規則正しすぎる。

人であって人でないものが、ただ純粹な責務として近づいてくる音だ。

彼が知っている間隔より、それはずっと遅い。

だが、同質のものだ。

それが何であるか、老人にはわかっていた。

言うことを聞かない臉を、ようやくこじ開けた時。

目前にあったのは、美しい金髪をした女だった。

漆黒の修道服に、均整の取れた長身を包んでいた。

ベッドの上で仰向けになった彼に覆い被さるようにして、わずかに微笑んでいる。姿形は彼女と似ても似つかない。だが、それは大した問題ではなかった。

「そうだ、メモリカードだ……」

思い通りにならない右手で、彼は自分の胸元を探る。

そこにあるべき防水ケースがなかった。

とっておきの煙草に代わり、宝を入れていた箱だ。長く苦しい旅の間中、どんな苦境にあつてさえ、決して中に水を入れず、手放すことはなかった箱だ。

腕だけを徐々に巡らし、枕元を探る。

指に何かに触れた。

小箱らしかった。

開け放たれたままの奥に硬質な感触を捕らえ、震える指で摘み上げた。

分銅のように重い……違う。重いのは腕だ。自分の意志を全く汲もうとしないそれを、少しずつ、本当に少しずつ、目前まで動かした。

ちいさなメモリカードは、ちいさな十字架に変わっていた。

混濁こんだくしていた記憶の芯に、不意に光が灯った。

そうだ、これも宝物だ。

レビ、ヨブ、ルツ。古い古い名前を持った三人の子供たち。星の人の証あかし。あのメモ

リカードと引き替えに、あの子たちが自分に贈ってくれたものだ。

きつと落ち込んでいることだろう。あるいは怒っているだろうか。教えることはたくさんあるのに、当の師匠が不甲斐ないことになってしまった。

だが、大丈夫だ。

あの三人ならきつとうまくやる。自分は彼らの中にもともとある真実を、作り物の星を使って垣間見せたに過ぎない。やがて彼らは自分たちでそれに気づくだろう。そして老いぼれた先代より、ずっと遠くまで行くだろう……

自分が笑みを浮かべているのに気づいた。

全てを見通しているかのように、修道女も微笑んでいる。

その胸元にも十字架があった。

そして老人は、彼女がなぜここに現れたかを考えた。

「……迎えに、来たのか」

老人は言った。

だが、返事はない。

「例の門はひとつなのか？」

重ねて問う。

「ふたつなら……俺は、行かないぞ……」

茶化したつもりだったが、少し息苦しい。

金髪の修道女は、端正な唇を動かさそうとした。

だが、そこから声は聞こえない。

長年放置されていたせいで、発声装置が既に役目を為していないのだろう。

無言の対話は十秒ほど続いただろうか。

やがて、修道女はゆつくりとその場に跪いた。

祈るように両手を合わせ、次いで両の瞳を閉じる。

その所作は、幾億の言葉より雄弁だった。

誘われ、老人も瞼を閉じた。

電源が落とされるように、全てが闇に覆われた。

だが、わずかの間だった。

意識が白く澄み渡り、視界が戻ってきた。

南米大陸の雪原に隠された、地下居住区の客間。照明が埋め込まれた高い天井、柔らかなベッドと清潔なシーツ。

部屋の隅に放置されたままの、粗末な手作りの携帯投影機。

だが、案ずることはない。それは新しい所有者たちの手により、きちんと整備され、改

良されていくだろう。

夜明けを待ちかねた夏の子供のように、老人はベッドから身を起こした。

両足を床に付き、立ち上がる。

失われたはずの右足はそこにあり、自由に動かすことができた。

客間の入り口から、橙色の灯かりが漏れてくる。

それは懐かしく、温かな色だった。

ただ引き寄せられるように、老人はそちらに近づいていった。

大きな円形の部屋があった。

半球状の高い屋根に、照度を落とした間接光が滲んでいた。

数え切れないほどの座席が、中央を囲うように円く並んでいる。

席にはびっしりと観客が座っている。

ところどころに、見知った姿があった。

身体の大きさほどもある花束を膝に乗せた、幼い少女がいた。

視線が合うと、可愛らしい手をひらひらと振ってくれた。

老人は通路に歩を進めた。

ちいさな兄妹が並んで座っていた。

興味津々な風の妹に、兄は自分が知っている限りの月のクレーターを教えていた。

一步、また一步……前に進むごとに、全てが鮮やかに色づき、蘇っていく。

若者も、年老いた者もいた。

家族連れも、友人同士も、恋人同士もいた。

皆、ゆったりとくつろぎ、これから始まる演し物を心待ちにしていた。

不思議だとは思わなかった。

老人は既に学んでいた。

心の天蓋は、時間も距離も障害としない。

それは暗闇にあつてこそ、全ての事象を映し出すのだ、と。

円まどかな客席の中心に、あの巨大な二球式の投影機があった。

まるで工房から納品されたばかりのように、全ての部品は一部の隙もなく組み上げられ、

レンズは尊い宝石のように、透明に磨かれていた。

その傍かたわらに、自動人形ロボットが佇たたずんでいた。

長い振り分け髪と大げさな髪飾りのリボン、十五ほどの少女のかたちもそのままに、両手の指を身体の前できちんと重ね合わせ、彼に微笑みかけていた。

老人も今や老人ではなかった。

雨の封印都市、忘れられたプラネタリウム、彼女と時を過ごした頃そのままの姿と心で、

彼は話しかけた。

「ひさしぶりだな」

「はい、おひさしぶりです」

彼女は言った。

几帳面きちょうめんな動作で右に小首を傾かしげ、光学樹脂の瞳をきゅっと細めた。

「元気そうだな」

「はい。わたしはロボットですので……」

その後を続けようとした時だった。

彼女の瞳が不意に潤うるみ、涙が頬を伝った。

それはとめどなく流れ、制服のネクタイに染み込み、胸の名札を濡らした。

言葉に言い尽くせない想いを、代わりに伝えているかのようにだった。

「そうか、泣けるようになったんだ……」

彼は歩み寄り、彼女の髪にそっと手を触れた。

そうだ、驚くには当たらない。

人の願いもロボットの願いも、ここでは全てが叶うのだから。

「はい、お客さま……」

従順なロボットは、はにかみながらそれだけを答えた。

「俺はお客じゃないよ」

彼はやさしくそう応じた。

周りには彼女の同僚たちが並び、結婚式の立ち会いのようにふたりを見守っている。初対面のはずなのに、ずっと昔から共に働いてきた仲間のように思えた。

そして、彼は悟った。

いつしかこの星に生まれ、この星が育^{はぐ}んできた、『星の人』の系譜。その末席^{まつせき}に今、自分も加わるのだと。

「さあ、投影を始めよう」

彼は静かに宣言し、相棒の少女に微笑みかけた。

万雷^{ばんらい}の拍手が響いた。

く
おわり
く